

Systemwalker Centric Manager V11.0/V12.0/V13



Cisco機器運用管理ガイド

第3.0版 2006年6月5日

まえがき

本書の目的

本書は、Systemwalker Centric Manager Standard Edition/Enterprise Edition V11.0L10/V12.0L10/V13.0.0 Windows 版、Systemwalker Centric Manager Standard Edition/Enterprise Edition 11.0/12.0/13.0.0 Solaris™ Operating System 版、Systemwalker Centric Manager Standard Edition/Enterprise Edition V11.0L10/V12.0L10/V13.0.0 Red Hat Enterprise Linux版でシスコ社製ネットワーク機器（ルータやスイッチ）の効率よい管理・監視を行うために提供している運用管理ツール（Cisco機器トラップメッセージ変換ツール）の導入から適用手順についてご説明しています。

本書の読者

本書は、Systemwalker Centric ManagerでCisco機器の管理・監視を行う方を対象としています。

本書をお読みになる前に、「Systemwalker Centric Manager解説書」をお読みになり、Systemwalker Centric Managerの概要を理解しておく必要があります。

本書の構成

本書は、1章から3章までで構成されています。

第1章 Cisco機器トラップメッセージ変換ツールの概要

Cisco機器トラップメッセージ変換ツールの機能と特長についてご説明します。

第2章 ツールのインストールと適用

Cisco機器トラップメッセージ変換ツールのインストール手順およびSystemwalker Centric Managerへの適用手順についてご説明します。

第3章 付録

Cisco機器トラップメッセージ変換ツールに関する補足事項について説明します。

本書の読み方

マニュアルの記号について

マニュアルでは、以下の記号を使用しています。



特に注意が必要な事項を説明しています。

注意事項

略語表記について

- Systemwalker Centric Manager Standard Edition/Enterprise Edition V11.0L10/V12.0L10/V13.0.0 Windows 版、Systemwalker Centric Manager Standard Edition/Enterprise Edition 11.0/12.0/13.0.0 Solaris OS 版、Systemwalker Centric Manager Standard Edition/Enterprise Edition V11.0L10/V12.0L10/V13.0.0 Linux 版を”Systemwalker Centric Manager”または”Systemwalker”と略しています。
- シスコ社製ルータやスイッチを、”Cisco機器”と略しています。
- Microsoft® Windows NT® Server network operating system Version 4.0、Microsoft® Windows NT® Workstation operating system Version 4.0を”Windows NT®”と略しています。
- Microsoft® Windows® 2000 Professional operating system、Microsoft® Windows® 2000 Server operating system および Microsoft® Windows® 2000 Advanced Server operating system を”Windows® 2000”と略しています。
- Microsoft® Windows Server™ 2003, Standard Edition、Microsoft® Windows Server™ 2003, Enterprise Editionを”Windows Server™ 2003”と略しています。
- Solaris™ 7 Operating System、Solaris™ 8 Operating System、Solaris™ 9 Operating System、Solaris™ 10 Operating Systemを”Solaris OS”と略しています。
- Red Hat Enterprise Linux AS/ES v.4を”Linux”と略しています。

輸出管理規制表記

当社ドキュメントには、外国為替および外国貿易管理法に基づく特定技術が含まれていることがあります。特定技術が含まれている場合は、該当ドキュメントを輸出または非住居者に提供するとき、同法に基づく許可が必要になります。

平成18年6月

平成16年3月	初版
平成17年2月	2.0版
平成18年6月	3.0版

商標について

CiscoとCisco Systemsは商標です。Ciscoのロゴは、Cisco Systems, Inc.の登録商標です。

MS、MS-DOS、Windows、Windows NTは、米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標です。

Microsoft Corporationのガイドラインに従って画面写真を使用しています。

UNIXは、X/Openカンパニーリミテッドが独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Sunロゴ、Solaris およびすべてのSolarisに関連する商標及びロゴは、米国およびその他の国における米国Sun Microsystems, Inc. の商標または登録商標であり、同社のライセンスを受けて使用しています。

Red Hat は Red Hat, Inc. の登録商標です。

Red Hat Shadow Man ロゴ、RPM、RPM ロゴ、および Glint は Red Hat, Inc. の登録商標です。

Linux は Linus Torvalds 氏の米国およびその他の国における登録商標あるいは商標です。

この文章で説明した商品、その他の製品名は、各社の商標または登録商標です。

All Rights Reserved, Copyright © 富士通株式会社 2002-2006

目次

第1章 Cisco機器トラップメッセージ 変換ツールの概要	1
1.1 概要	2
1.2 ツールの種類	4
1.2.1 Windows版	4
1.2.2 Solaris OS/Linux版	4
第2章 ツールのインストールと適用	5
2.1 インストール手順	6
2.1.1 Windows版のインストール	6
2.1.2 Solaris OS/Linux版のインストール	7
2.2 ツールの適用	9
2.2.1 Windows版の場合	9
2.2.2 Solaris OS/Linux版の場合	10
第3章 付録	13
3.1 概要	14
3.2 追加例	16
3.2.1 トラップメッセージの確認	16
3.2.2 トラップメッセージの調査	17
3.2.3 T2E変換定義ファイルの作成	18
3.2.4 T2E変換定義ファイルのチェックと擬似トラップコマンドの作成	22
3.2.5 T2E変換定義ファイルの適用	24
3.2.6 擬似トラップコマンドによるテストの実施	26

第1章 Cisco機器トラップメッセージ 変換ツールの概要

本章では、Cisco機器トラップメッセージ変換ツールの概要について説明します。

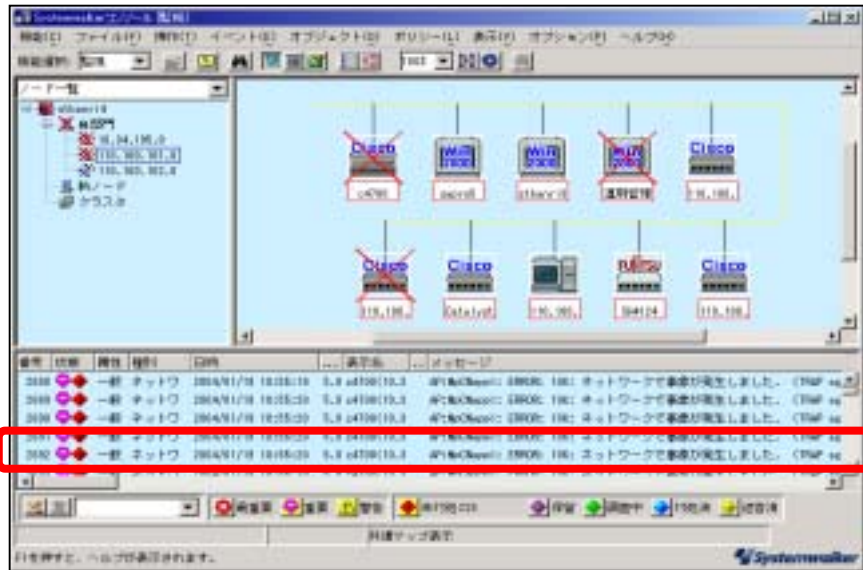
本章は次の各節から構成されています。

- 1.1 概要
- 1.2 ツールの種類
 - 1.2.1 Windows版
 - 1.2.2 Solaris OS/Linux版

1.1 概要

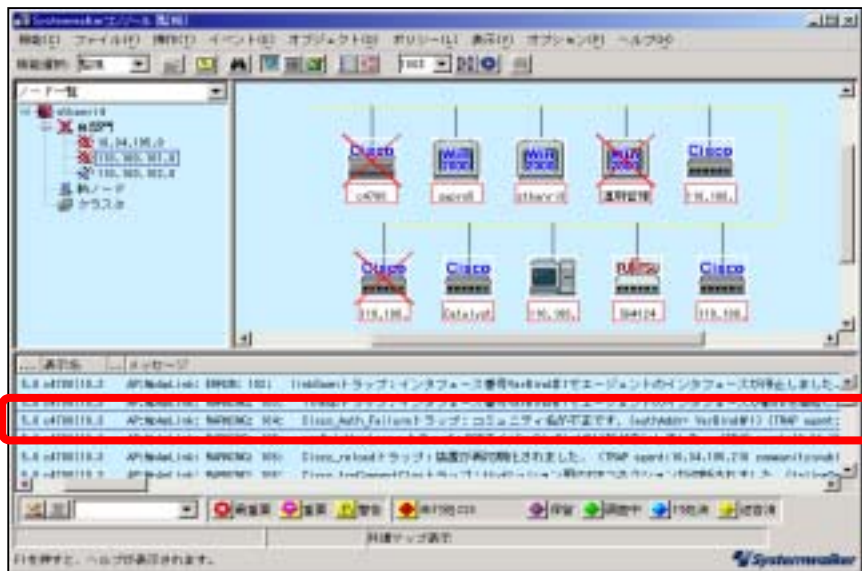
Cisco機器トラップメッセージ変換ツールは、Cisco機器からSystemwalkerに送信されるトラップメッセージを日本語に翻訳し、Systemwalkerの監視イベント一覧に分かりやすく表示します。

図1-1のようにCisco機器から送られてくるトラップメッセージのほとんどは、「...ネットワークで事象が発生しました。...」と監視イベント一覧に表示されますので、実際にどのような事象が発生したのかを、メッセージ詳細を表示して確認する必要がありました。



【図1-1 ツール適用前のトラップメッセージ】

Cisco機器トラップメッセージ変換ツールをSystemwalkerに適用することによって、Cisco機器からのトラップメッセージは図1-2のように表示されます。



【図1-2 ツール適用後のトラップメッセージ】

図1-2のように、「Cisco_Auth_Failureトラップ: コミュニティ名が不正です。」というような具体的なメッセージに翻訳されて監視イベント一覧に表示されます。そのため、トラップの意味が分かりやすくなり、Cisco機器の障害発生時に迅速な対応が可能となります。

Cisco機器トラップメッセージ変換ツールでは、Cisco機器から発生するトラップの重要度に応じて、以下の重要度レベルのメッセージに変換し、監視イベント一覧に出力します。

- ・エラー (ERROR): 監視イベント一覧に“重要”と表示します。
- ・警告 (WARNING): 監視イベント一覧に“警告”と表示します。

1.2 ツールの種類

Cisco機器トラップメッセージ変換ツールは、Systemwalkerホームページ (Systemwalker技術情報) からダウンロードし、利用することができます。

このツールは、Systemwalker運用管理サーバのOS種別によってWindows版とSolaris OS/Linux版の2つに別れておりますので、OS種別にあわせてツールをダウンロードして下さい。

1.2.1 Windows版

Systemwalker運用管理サーバが”Windows NT®”、”Windows® 2000”、”Windows Server™ 2003”の場合、Windows版Cisco機器トラップメッセージ変換ツールを使用します。

Systemwalkerホームページ (Systemwalker技術情報) からWindows版Cisco機器トラップメッセージ変換ツール (ctrp_20060605.exe) をダウンロードし、ご利用下さい。またツールは、自己解凍形式で提供していますので、運用管理サーバにコピーした後、解凍して下さい。

詳細については、「2.1.1 Windows版のインストール」を参照して下さい。

1.2.2 Solaris OS/Linux版

Systemwalker運用管理サーバが”Solaris OS”または”Linux”の場合、Solaris OS/Linux版Cisco機器トラップメッセージ変換ツールを使用します。

Systemwalkerホームページ (Systemwalker技術情報) からSolaris OS/Linux版Cisco機器トラップメッセージ変換ツール (ctrp_20060605.tar.Z) をダウンロードし、ご利用下さい。またツールは、圧縮 (Compress, TAR形式) しておりますので、運用管理サーバにコピーした後UncompressおよびTARユティリティを使用して解凍して下さい。

詳細については、「2.1.2 Solaris OS/Linux版のインストール」を参照して下さい。

第2章 ツールのインストールと適用

本章では、Cisco機器トラップメッセージ変換ツールのインストール方法とツールの適用方法について説明します。

本章は次の各節から構成されています。

2.1 インストール手順

2.1.1 Windows版のインストール

2.1.2 Solaris OS/Linux版のインストール

2.2 ツールの適用

2.2.1 Windows版の場合

2.2.2 Solaris OS/Linux版の場合

2.1 インストール手順

Cisco機器トラップメッセージ変換ツールのインストール手順についてご説明します。この作業は、Windows版とSolaris OS/Linux版では手順が異なりますので注意して下さい。

尚、これ以降の作業は管理者権限のあるユーザにて実施して下さい。

2.1.1 Windows版のインストール

Systemwalker運用管理サーバがWindows版の場合、Windows版Cisco機器トラップメッセージ変換ツールを運用管理サーバ上にインストールします。

ツールのインストール手順は、以下の通りです。

Systemwalkerホームページ(Systemwalker技術情報)からダウンロードしたCisco機器トラップメッセージ変換ツール(ctrap_20060605.exe)を、運用管理サーバの任意のディレクトリ(C:¥など)にコピーします。

コマンドプロンプトを起動し、ツールのコピー先(C:¥)にカレントを移動します。

以下のコマンドを実行します。

```
ctrap_20060605.exe
```

Cisco機器トラップメッセージ変換ツールは、自己解凍形式で提供しています。コマンド実行後、「ctrap_20060605.exe」を実行したカレントディレクトリに「CW2KTOOL¥ciscotrapディレクトリ」が作成され、このディレクトリ内にツールが解凍されます。

運用管理サーバのインストールドライブやインストールディレクトリ名を変更してインストールした場合、ツール内の登録コマンド(setcnvtrp.bat)を編集します。この登録用コマンドは、「<カレントディレクトリ>¥CW2KTOOL¥ciscotrapディレクトリ」にあります。

メモ帳などのテキストエディタを起動し、登録コマンド(setcnvtrp.bat)を開きます。以下を参考にして、ファイル内のパラメタを編集します。

```
@Echo off
set TOOLROOT=C:¥CW2KTOOL¥ciscotrap¥CONFIG (注1)
set SWROOT=C:¥win32app¥mpwalker.dm¥mpcnappl¥mpcnmgr¥bin (注2)
```

注1：ツールのインストールディレクトリを設定します。

注2：Systemwalker運用管理サーバのインストールディレクトリを設定します。

◆ 例：運用管理サーバのインストールディレクトリが「D:¥SW」の場合

```
@Echo off
set TOOLROOT=C:¥CW2KTOOL¥ciscotrap¥CONFIG
set SWROOT=D:¥SW¥mpwalker.dm¥mpcnappl¥mpcnmgr¥bin
```

以上でインストールが完了です。

2.1.2 Solaris OS/Linux版のインストール

Systemwalker 運用管理サーバがSolaris OS/Linux版の場合、Solaris OS/Linux版Cisco機器トラップメッセージ変換ツールを運用管理サーバ上にインストールします。

ツールのインストール手順は、以下の通りです。

Systemwalkerホームページ(Systemwalker技術情報)からダウンロードしたCisco機器トラップメッセージ変換ツール(ctrap_20060605.tar.Z)を運用管理サーバの任意のディレクトリ(/var/tmpなど)にコピーします。

運用管理サーバにスーパーユーザでログインし、ツールのコピー先(/var/tmp)にカレントを移動し、以下のコマンドを実行します。

```
uncompress ctrap_20060605.tar.Z
```

上記コマンドによって、カレント上に「ctrap_20060605.tarファイル」が作成されますので、続けて以下のコマンドを実行します。

```
tar xvf ctrap_20060605.tar
```

コマンド実行後、/var/tmpディレクトリ配下に「ciscotrapディレクトリ」が作成されます。

以下にコマンドの実行例を示します。

```
#uncompress ctrap_20060605.tar.Z
# tar xvf ctrap_20060605.tar
x trap, 0 bytes, 0 tape blocks
x ciscotrap/setcnvtrpvb, 5555 bytes, 11 tape blocks
x ciscotrap/Cnvtrpvb, 0 bytes, 0 tape blocks
x ciscotrap/Cnvtrpvb/.1.3.6.1.3.71.2.cnf, 1041 bytes, 3 tape
blocks
.
.
.
x ciscotrap/Cnvtrpvb/mgmt.1.47.2.cnf, 473 bytes, 1 tape blocks
x ciscotrap/Cnvtrpvb/snmpTraps.cnf, 2870 bytes, 6 tape blocks
#
```

【図2-1 Solaris OS/Linux版Cisco機器トラップメッセージ
変換ツールの解凍例】

以上でインストールが完了です。

2.2 ツールの適用

Cisco機器トラップメッセージ変換ツールの適用作業についてご説明します。
この作業は、運用管理サーバがWindows版とSolaris OS/Linux版では手順が異なりますので注意して下さい。

2.2.1 Windows版の場合

運用管理サーバがWindows版の場合のツール適用手順についてご説明します。

運用管理サーバのコンソールからコマンドプロンプトを起動し、ツールをインストールしたディレクトリ(C:¥CW2KTOOL¥ciscotrap)にカレントを移動します。

以下のコマンドを実行します。

```
setcnvtrp.bat
```

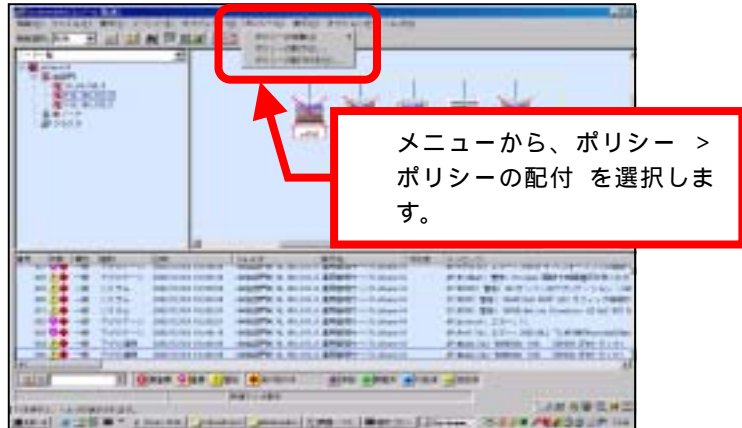
このコマンドを実行すると、以下のようなメッセージが出力されます。

```
C:¥CW2KTOOL¥ciscotrap>setcnvtrp.bat
*****
Check processing Start.
*****
.
.
*****
Check processing has ended.
    Processed records      : 17
    Processed definitions  : 1
*****
C:¥CW2KTOOL¥ciscotrap>
```

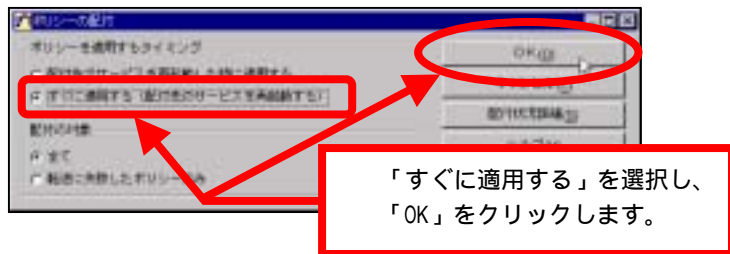
【図2-2 setcnvtrp.bat実行例】

コマンド実行の際、Warningメッセージ (You should check the representation of Enterprise-0ID in your target Systemwalker system) が出力される場合がありますが、特に問題はありません。

ポリシー配布を行う為にSystemwalkerコンソールを起動します。



【図2-3 ポリシー配付 01】



【図2-4 ポリシー配付 02】

しばらくすると、ポリシー配付の処理が終了します。
以上で適用の処理が完了です。

2.2.2 Solaris OS/Linux版の場合

運用管理サーバがSolaris OS/Linux版の場合のツール適用手順についてご説明します。

運用管理サーバにスーパーユーザでログインし、ツールをインストールしたディレクトリ (/var/tmp/ciscotrap) にカレントを移動します。

以下のスクリプトを実行します。

```
setcnavtrp.sh
```

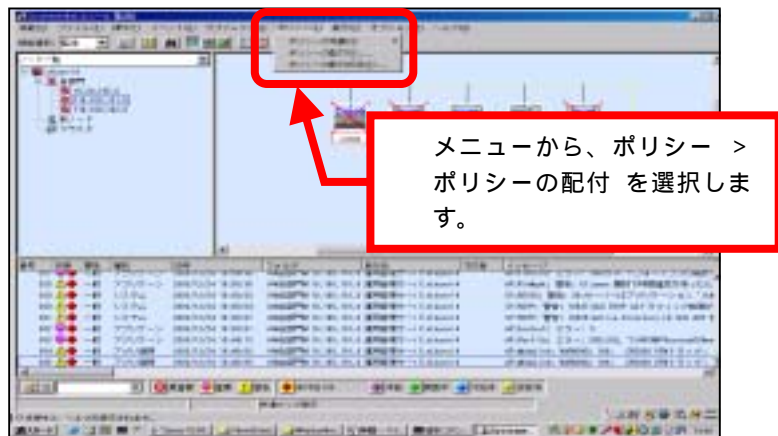
このスクリプトを実行すると、以下のようなメッセージが出力されます。

```
#setcnvtrp.sh
*****
Check processing Start.
*****
.
    Processed records      : 17
    Processed definitions : 1
*****
#
```

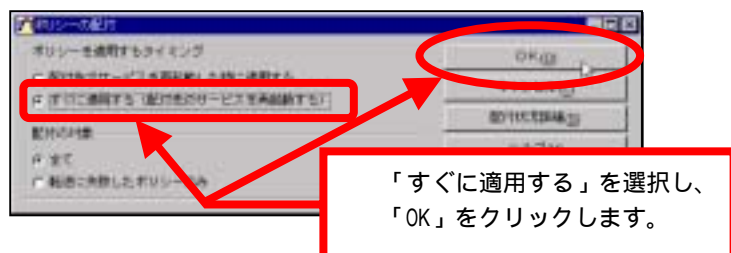
【図2-5 setcnvtrp.sh実行例】

スクリプト実行の際、Warningメッセージ（You should check the representation of Enterprise-01D in your target Systemwalker system）が出力される場合がありますが、特に問題はありません。

ポリシー配布を行なう為に運用管理クライアントから、Systemwalkerコンソールを起動します。



【図2-6 ポリシー配布 01】



【図2-7 ポリシー配布 02】

しばらくすると、ポリシー配付の処理が終了します。
以上で適用の処理が完了です。

第3章 付録

本章では、Cisco機器トラップメッセージ変換ツールに関する補足事項として新規に追加されたトラップメッセージを日本語に変換する方法について説明します。

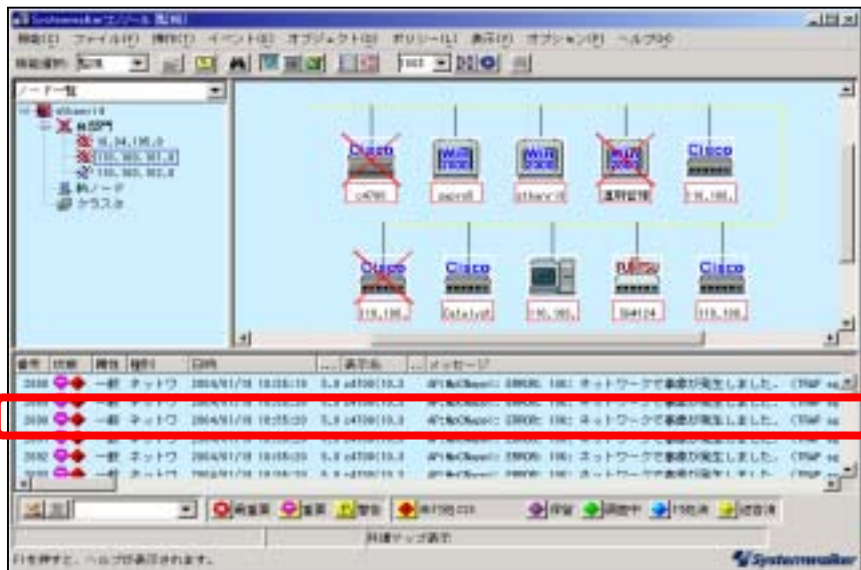
本章は次の各節から構成されています。

- 3.1 概要
- 3.2 追加例
 - 3.2.1 トラップメッセージの確認
 - 3.2.2 トラップメッセージの調査
 - 3.2.3 T2E変換定義ファイルの作成
 - 3.2.4 T2E変換定義ファイルのチェックと擬似トラップコマンドの作成
 - 3.2.5 T2E変換定義ファイルの適用
 - 3.2.6 擬似トラップコマンドによるテストの実施

3.1 概要

新規にリリースされたCisco機器を追加したりIOSの最新版へのアップグレードなどを行うと、トラップメッセージが新規に追加される場合があります。

このような場合、Systemwalkerコンソール上(監視イベント一覧)には、「...ネットワークで事象が発生しました...」と表示されます。このトラップに対応するメッセージ定義情報を新規に作成し追加する事で、トラップの内容を分かり易い日本語メッセージへの変換が可能となります。



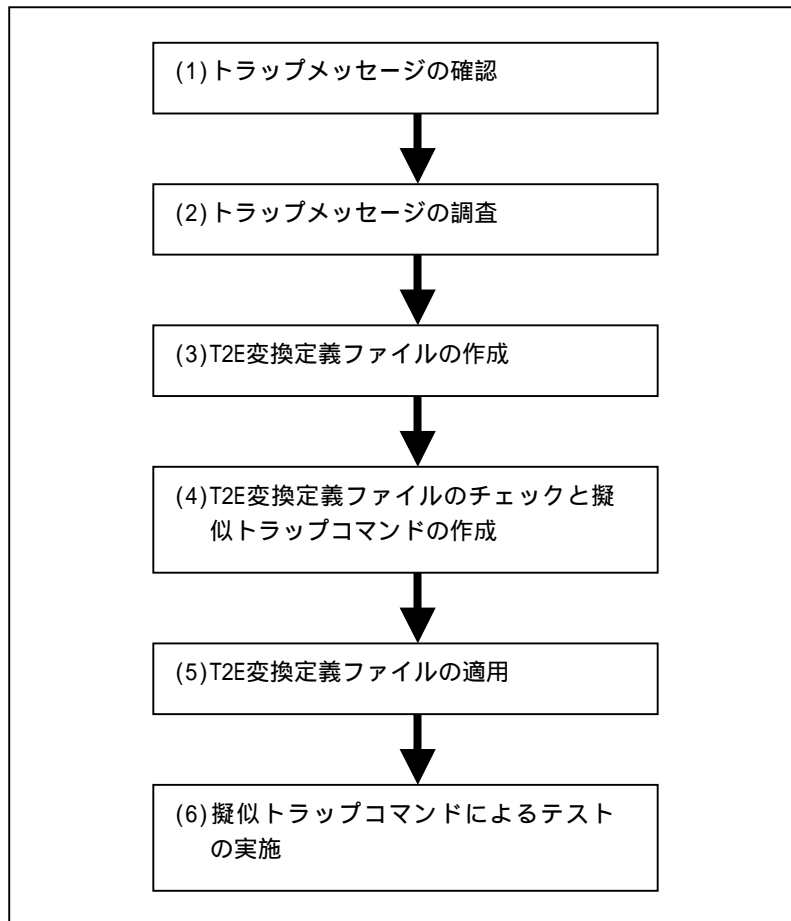
【図3-1 監視イベント一覧上の新規トラップメッセージ】

日本語メッセージの作成や追加は、SNMPトラップ変更ツールキット(以降、T2Eツールキットと呼ぶ)(注1、注2)を使用し、新規トラップメッセージのメッセージ定義情報(以降、T2E変換定義ファイルと呼ぶ)を作成します。

注1：T2Eツールキットは、Systemwalker運用管理サーバがWindows版の場合は運用管理サーバに、Systemwalker運用管理サーバがSolaris OS/Linux版の場合は運用管理クライアントにインストールします。

注2：T2Eツールキットの詳細については、Systemwalkerホームページ(Systemwalker技術情報)の「SNMPトラップ変更ツールキット使用手引書」を参照して下さい。

新規に追加されたトラップメッセージを日本語に変換する流れは以下のようになります。



3.2 追加例

ここでは、「SNMPトラップ変更ツールキット使用手引書」の「2.2 Trap仕様からT2E変換定義ファイルを作成する」を元にして、無線LANシステムから通知された新規トラップメッセージを変換する手順を例に説明します。

3.2.1 トラップメッセージの確認

Systemwalker コンソールの監視イベント一覧上のトラップメッセージの内容を参照し、以下の項目を確認します。

```

1, "NORMALMSG", "Trouble", "ネットワーク",
"2004/01/22 09:49:50",
"sapro5¥自部門¥192.168.1.0", "192.168.1.200", "192.168.1.200",

"AP:MpCnAppI: ERROR: 106: ネットワークで事象が発生しました .

(TRAP agent:192.168.1.200
community:public
generic:6 → 1. Generic-Codeの値
enterprise:enterprises.9.9.224.2.0 → 2. Enterprise-OIDの値(ドット表記)
specific:1 → 3. Specific-Codeの値
timestamp:119053469

varbind: → 4. Varbind情報の内容
(enterprises.9.9.224.1.1.5.1.2.54 [2 1 0] 6)
(enterprises.9.9.224.1.1.5.1.3.54 [1 1 0] 1)
(enterprises.9.9.224.1.1.5.1.4.54 [2 12 0] 192.168.1.35)
(enterprises.9.9.224.1.1.5.1.5.54 [2 2 0] P2)
(enterprises.9.9.224.1.1.5.1.6.54 [8 9 0] 119053465)
(enterprises.9.9.224.1.1.5.1.7.54 [2 217 0] FaultId 6 DeviceId 110 DeviceIP
192.168.1.35 DeviceName 192.168.1.35 MO Device Change WDS appears down
ChangeSeverity P2 StateChange WdsStatus is WSDDown AlarmState Active
OverallSeverity P1 DeviceType IOSAccessPoint )
(enterprises.9.9.224.1.1.5.1.8.54 [2 39 0]
FaultNotifier@WLSE.ciscolab.fujitsu.com)

", "", "", "20040122144946.359000+540", ""
    
```

【図3-2 トラップメッセージの内容】

メッセージのトラップ情報、varbind情報については、MIB定義ファイルを参照して下さい。MIB定義ファイルの参照については、MIB定義ファイルについては、Cisco社のホームページ(<http://www.cisco.com/>) より入手して下さい。

尚、MIB定義ファイルの内容を調べるには、Cisco社のホームページ「SNMPオブジェクトナビゲータ」(<http://www.cisco.com/japanese/warp/public/3/jp/service/tac/tool/SNMP.shtml>)が便利です。

3.2.2 トラップメッセージの調査

Cisco社のホームページから調査した結果、この新規トラップメッセージは以下のような情報であることが判明しました。

項目	コード	意味
generic	6	-
enterprises	enterprises.9.9.224.2.0	NMS(Network Management System)が検知した例外事象に関するトラップID
specific	1	-
varbind	enterprises.9.9.224.1.1.5.1.2.54	例外用識別コード
	enterprises.9.9.224.1.1.5.1.3.54	InetAddressType 0: unknown 1: ipv4 2: ipv6 16: dns
	enterprises.9.9.224.1.1.5.1.4.54	例外が起こったホスト装置アドレス
	enterprises.9.9.224.1.1.5.1.5.54	例外のプライオリティ
	enterprises.9.9.224.1.1.5.1.6.54	例外が起こった時のタイムスタンプ
	enterprises.9.9.224.1.1.5.1.7.54	例外に関する詳細情報
enterprises.9.9.224.1.1.5.1.8.54	例外の報告元	

【表3-1 新規トラップメッセージの意味(例)】

3.2.3 T2E変換定義ファイルの作成

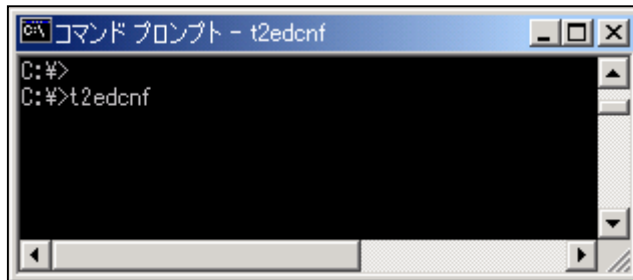
T2EツールキットのT2E変換定義ファイルエディタ(t2edcnfコマンド)を使用して、T2E変換定義ファイルを作成します。

ここでは、図3-2に示す新規トラップメッセージを元にして、「ネットワークで事象が発生しました」の部分を、以下のようなメッセージに変換するものとします。

Cisco NMSが、「192.168.1.35」の状態変化を検知しました。

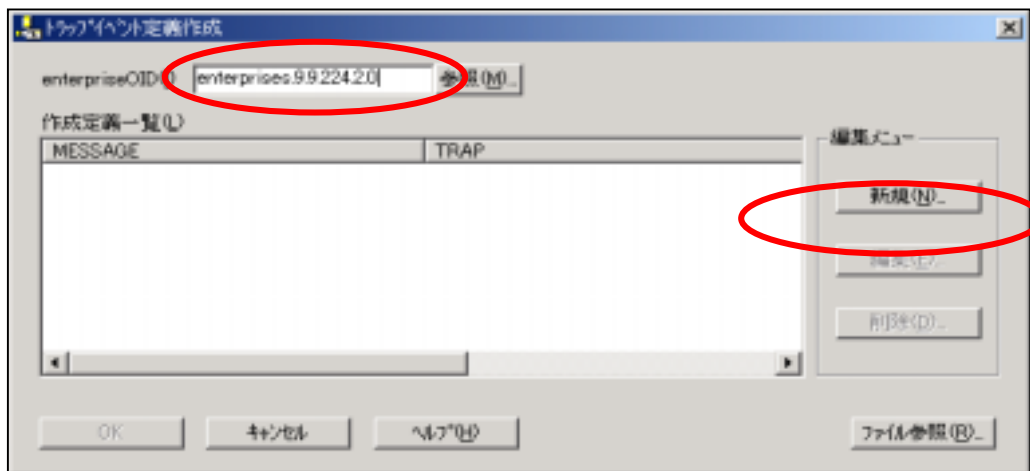
【図3-3 変換後トラップメッセージの内容】

T2E変換定義ファイルエディタ(t2edcnfコマンド)を起動します。



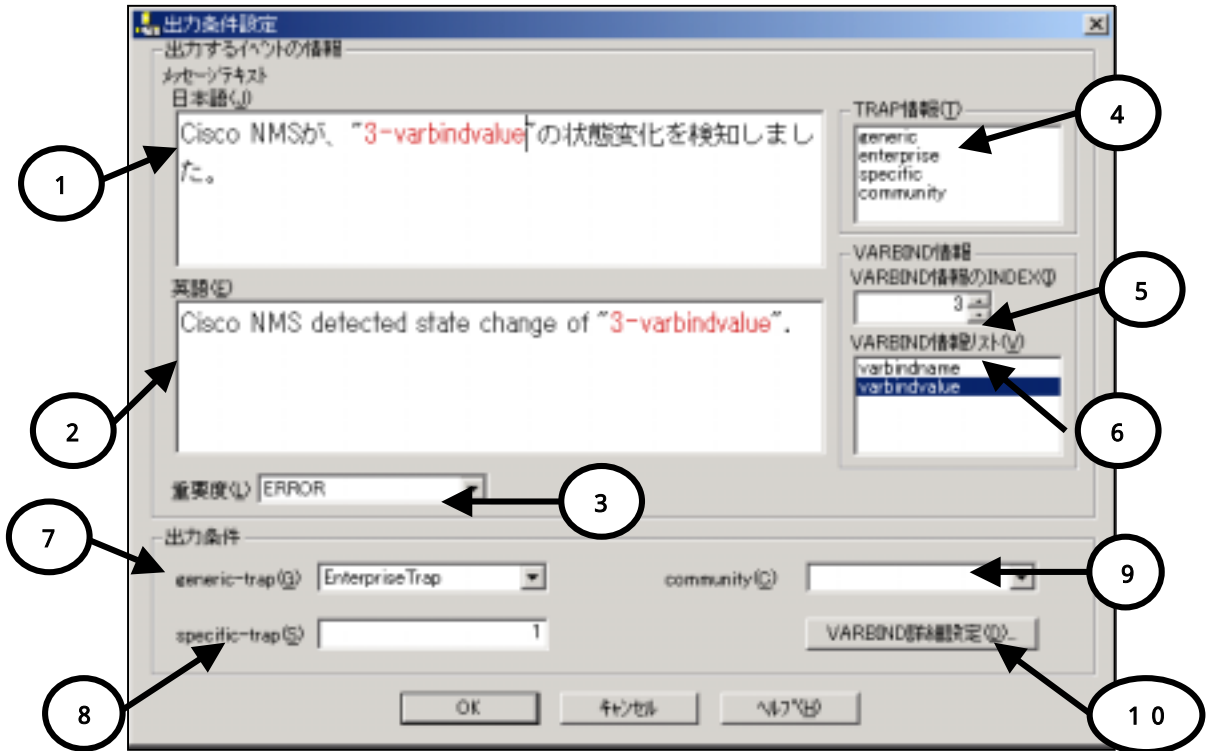
【図3-4 T2E変換定義ファイルエディタ 01】

受信したトラップメッセージのenterpriseOIDを入力して、「新規」ボタンをクリックします。



【図3-5 T2E変換定義ファイルエディタ 02】

出力条件設定画面で、調査したトラップ情報、varbind情報を元に自分で考えたメッセージを入力していきます。今回はメッセージ中にvarbind情報の3番目の値を挿入したメッセージを作成しています。各情報の入力については、表3-2、3-3中の番号に対応する項目を参照して下さい。



【図3-6 T2E変換定義ファイルエディタ 03】

◆ 出力するイベントの情報

表示させたいメッセージ内容を設定します。入力する情報は、以下の通りです。

項目	説明
メッセージテキスト(日本語)	受信したトラップメッセージの内容を日本語で記述します。 また、元のトラップメッセージのトラップ情報、varbind情報を任意の場所に挿入する事が可能です。(注1) 動作OSが日本語の場合、本欄の内容が出力されます。
メッセージテキスト(英語)	受信したトラップメッセージの内容を英語で記述します。 また、元のトラップメッセージのトラップ情報、varbind情報を任意の場所に挿入する事が可能です。(注1) 動作OSが日本語以外の場合、本欄の内容が出力されます。
重要度	受信したトラップメッセージの重要度を設定します。
TRAP情報	genericコード等のTRAP情報をメッセージテキストに挿入する際に、選択して使用します。
VARBIND情報のINDEX	VARBIND情報をメッセージテキストに挿入する際、何番目のVARBIND情報を挿入するかをここで切り替えます。
VARBIND情報リスト	VARBIND情報をメッセージテキストに挿入する際、「varbindname」「varbindvalue」のどちらを使用するか選択します。

【表3-2 出力するイベントの詳細】

注1：メッセージテキスト内にTRAP情報やVARBIND情報を挿入する手順

- ア) メッセージテキスト内のTRAP情報やVARBIND情報を挿入したい部分にカーソルを合わせます。
- イ) 「 VARBIND情報のINDEX」を変更する事により、何番目のVARBIND情報を挿入するかを変更します。
- ウ) 挿入したい情報を「 TRAP情報」や「 VARBIND情報」のリストから選びダブルクリックします。(又はスペースキーを押します)
- エ) 可変文字は赤い文字でメッセージテキスト内に挿入されます。

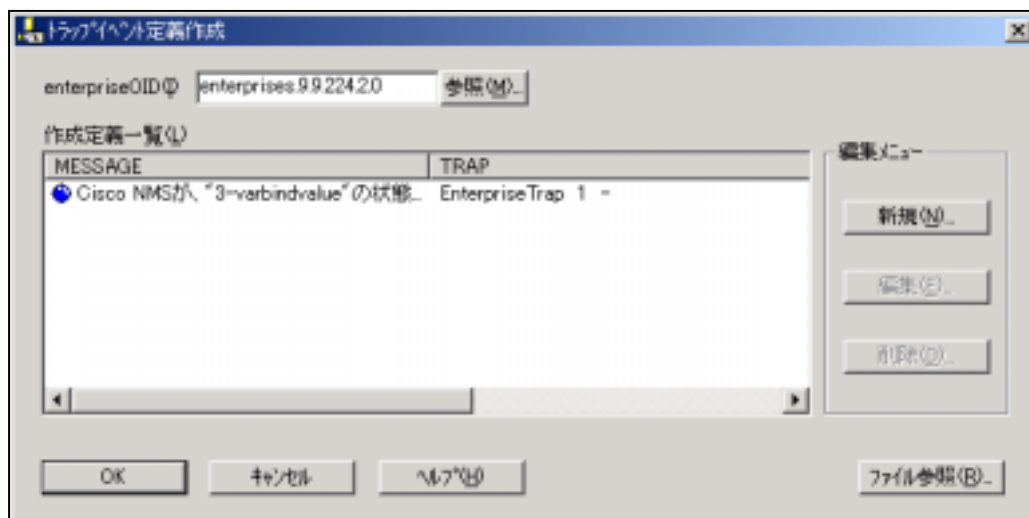
◆ 出力条件

メッセージ変換を行う条件を設定します。入力する情報は、以下の通りです。

項目	説明
generic-trap	受信したTrapのGeneric-Code(Trap種別)の値を選択します。
specific-trap	受信したTrapのSpecific-Codeを入力します。
Community	受信したTrapのCommunity名を入力します。
VARBIND詳細設定	VARBIND情報をメッセージ変換条件にする場合、設定します。

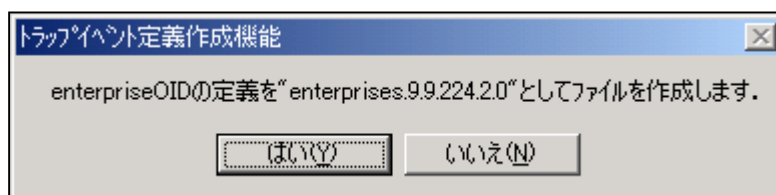
【表3-3 出力条件欄】

メッセージ編集が完了したら、「OK」ボタンをクリックします。



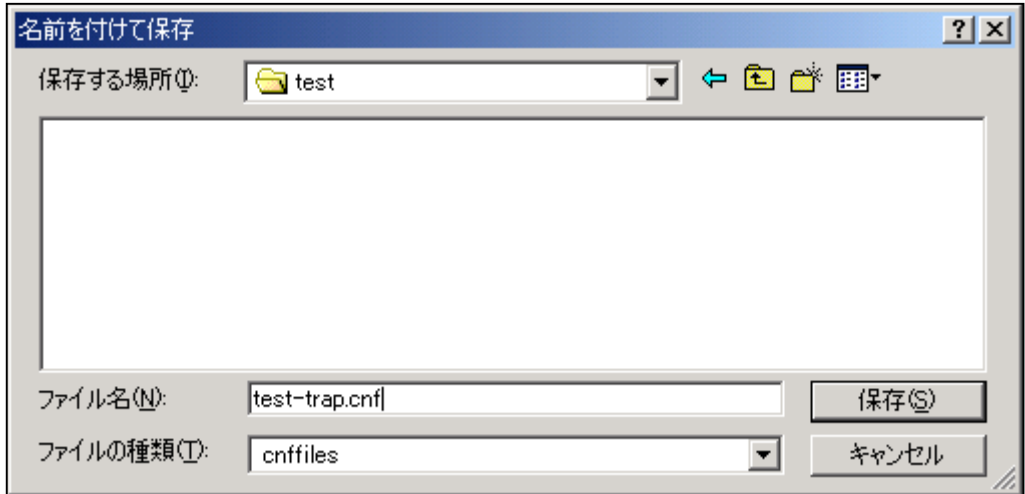
【図3-7 T2E変換定義ファイルエディタ 04】

以下のようなダイアログが表示されるので、「はい」ボタンをクリックします。



【図3-8 T2E変換定義ファイルエディタ 05】

T2E変換定義ファイルを名前を付けて保存します。
保存する場所、T2E変換定義ファイルの名前は、任意に指定可能です。
以下の例では、「c:\test」ディレクトリに作成したT2E変換定義ファイルを
「test-trap.cnf」という名前で保存しています。



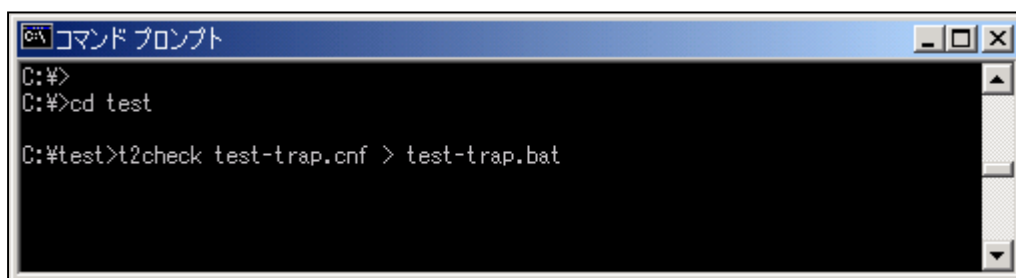
【図3-9 T2E変換定義ファイルエディタ 06】

3.2.4 T2E変換定義ファイルのチェックと擬似トラップコマンドの作成

作成したT2E変換定義ファイルが、正しく出来ているかT2Eツールキットのt2checkコマンドを使用して、チェックを行います。また、同時にこのコマンドの結果をリダイレクションする事で、擬似トラップ生成コマンドを作成する事が出来ます。

t2checkコマンドの詳細については、「SNMPトラップ変更ツールキット使用手引書」の「付録A コマンドレファレンス」を参照して下さい。

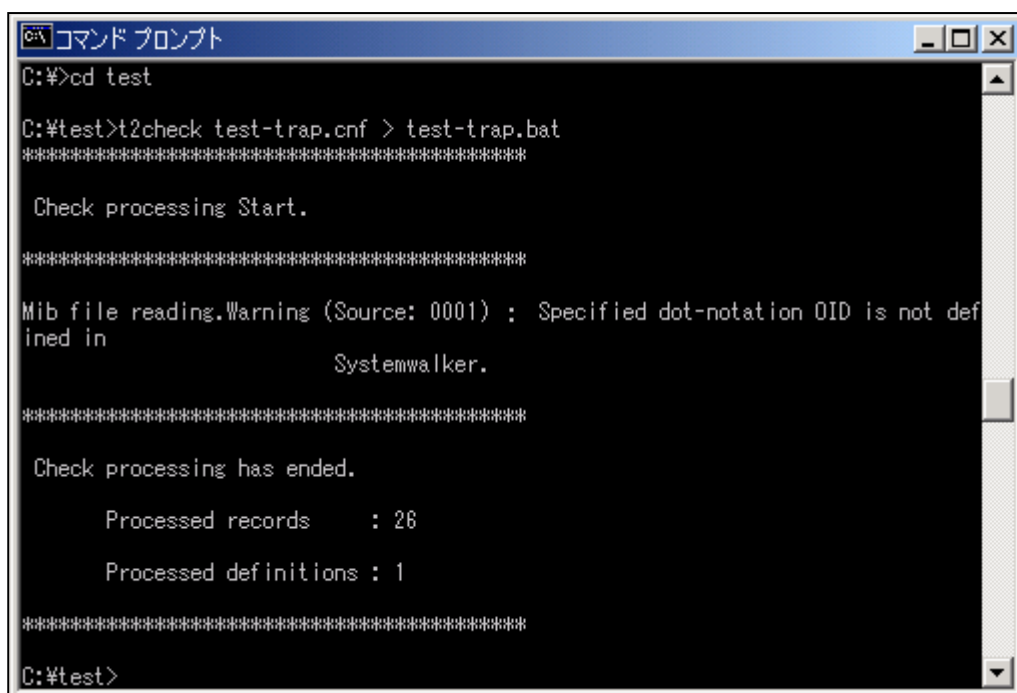
以下の例では、先程作成したT2E変換定義ファイル(test-trap.cnf)を、t2checkコマンドを使用してチェックを行いつつ、「test-trap.bat」という擬似トラップコマンドを作成しています。



```
コマンド プロンプト
C:¥>
C:¥>cd test
C:¥test>t2check test-trap.cnf > test-trap.bat
```

【図3-10 T2E変換定義ファイルのチェックと擬似トラップの作成】

また、以下のようなワーニングメッセージ「Specified dot-notation OID is not defined in Systemwalker.」が出力される事がありますが、特に問題はありませぬ。



```
コマンド プロンプト
C:¥>cd test
C:¥test>t2check test-trap.cnf > test-trap.bat
*****

Check processing Start.

*****

Mib file reading.Warning (Source: 0001) : Specified dot-notation OID is not defined in
                               Systemwalker.

*****

Check processing has ended.

Processed records      : 26
Processed definitions : 1

*****
C:¥test>
```

【図3-11 ファイルチェック時のワーニングメッセージ】

3.2.5 T2E変換定義ファイルの適用

T2EツールキットのCNSetCnfMgコマンドを使用して、T2E変換定義ファイルを適用します。CNSetCnfMgコマンドの詳細については、「SNMPトラップ変更ツールキット使用手引書」の「付録A コマンドレファレンス」、「付録C T2E変換機能の概要」を参照して下さい。

チェック済みのT2E変換定義ファイルをSystemwalker運用管理サーバ上の任意のディレクトリにコピーし、Systemwalker運用管理サーバ上でCNSetCnfMgコマンドを実行します。(注1、注2)

注1：T2E変換定義ファイルの指定は、絶対パスで記述して下さい。

注2：「3.2(4) T2E変換定義ファイルのチェックと擬似トラップコマンドの作成」の時と同様に「Specified dot-notation OID is not defined in Systemwalker.」のワーニングメッセージが出力される場合がありますが、特に問題はありません。

Windows版の場合

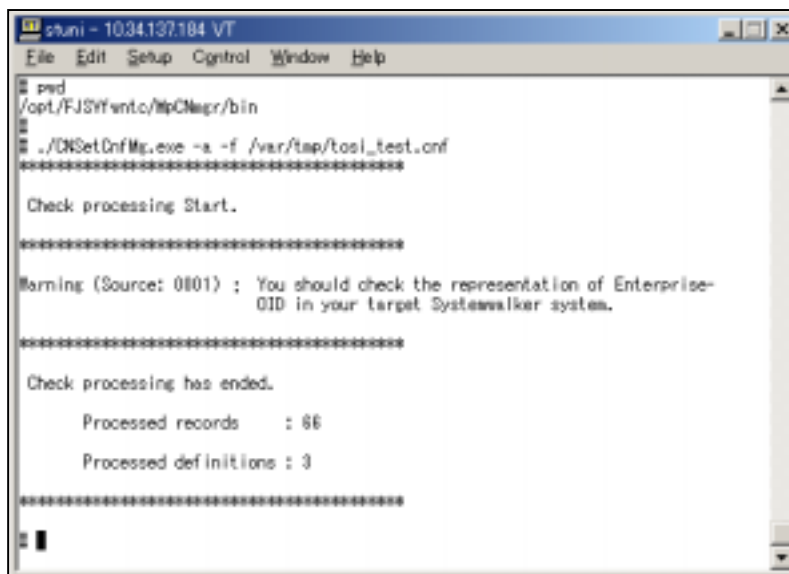
以下の例では、T2E変換定義ファイルを(trap.cnf)をディレクトリ(c%:test)にコピーし、CNSetCnfMgコマンドの追加モードを使用して適用しています。



【図3-12 T2E変換定義ファイルの適用例(Windows版)】

Solaris OS/Linux版の場合

以下の例では、T2E変換定義ファイルを(tosi_test.cnf)をディレクトリ(/var/tmp)にコピーし、CNSetCnfMgコマンドの追加モードを使用して適用しています。



```
shuni - 1034.137.184 VT
File Edit Setup Control Window Help
prd
/opt/FJStfentc/MpCNepr/bin
./CNSetCnfMg.exe -a -f /var/tmp/tosi_test.cnf
*****

Check processing Start.

*****

Warning (Source: 0801) : You should check the representation of Enterprise-
                        OID in your target Systemwalker system.

*****

Check processing has ended.

        Processed records      : 66
        Processed definitions   : 3

*****
```

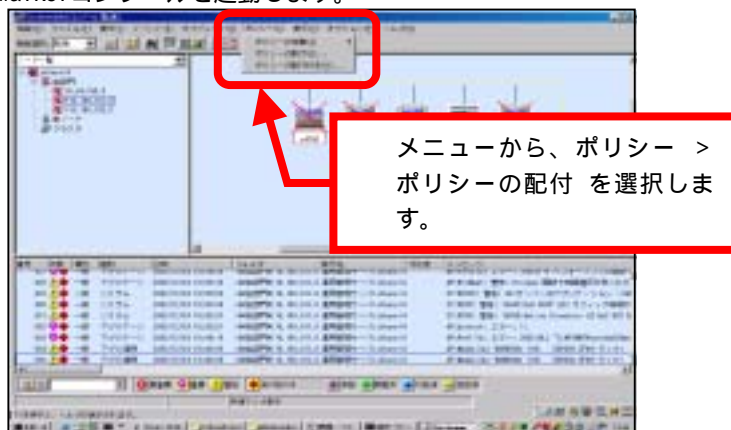
【図3-13 T2E変換定義ファイルの適用例(Solaris OS/Linux版)】



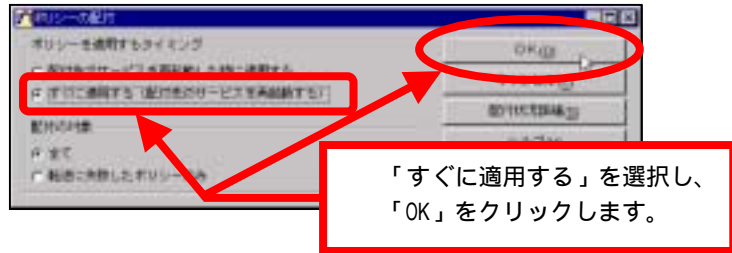
注意

Solaris OS/Linux版はT2EツールキットはSystemwalker運用管理クライアントにインストールしますが、CNSetCnfMgコマンドは運用管理サーバ上で実行してください。

Systemwalkerコンソールを起動します。



【図3-14 ポリシー配付 01】



【図3-15 ポリシー配付 02】

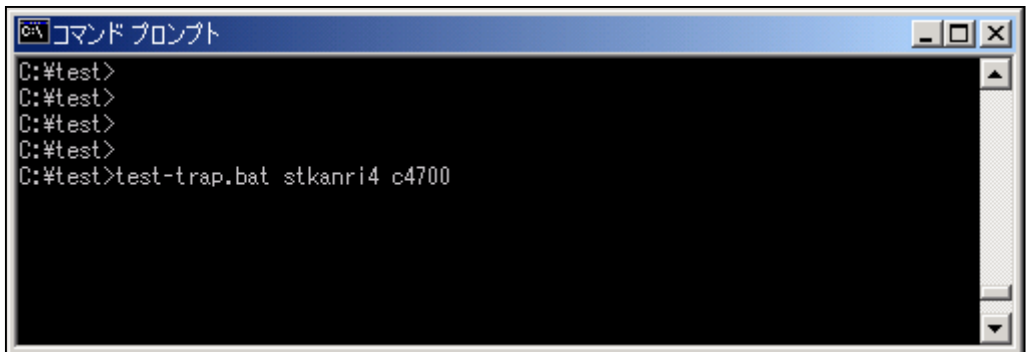
しばらくすると、ポリシー配付の処理が終了します。
以上で適用の処理が完了です。

3.2.6 擬似トラップコマンドによるテストの実施

「3.2(4) T2E変換定義ファイルのチェックと擬似トラップコマンドの作成」
で作成した擬似トラップコマンドを使用して意図した通りの変換が行われ
ているか確認します。(注1)

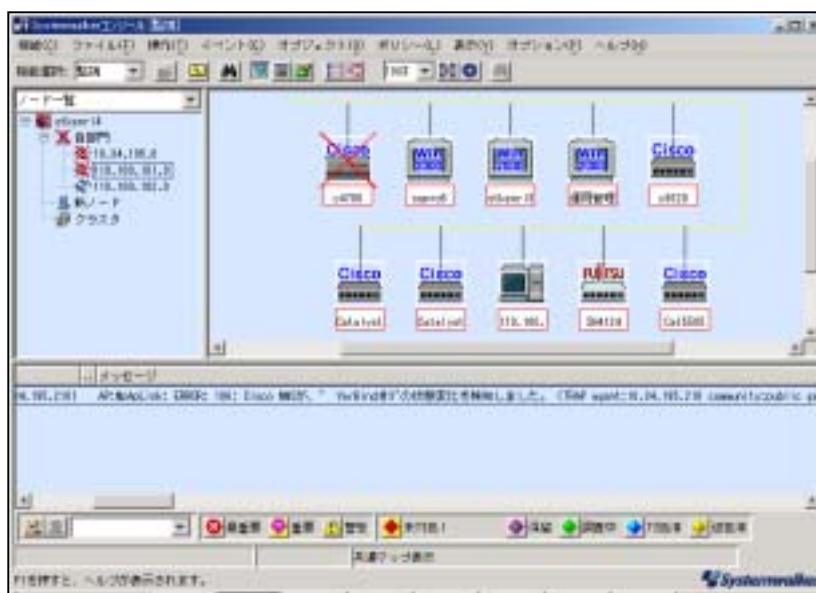
以下の例では、擬似トラップコマンド(test-trap.bat)を使用して、Cisco
機器(c4700)から運用管理サーバ(stkanri4)に向けて擬似トラップメッセ
ージを発行しています。

注1：擬似トラップコマンドは、T2Eツールキットをインストールしたマ
シンで実行してください。



【図3-16 擬似トラップコマンド実行】

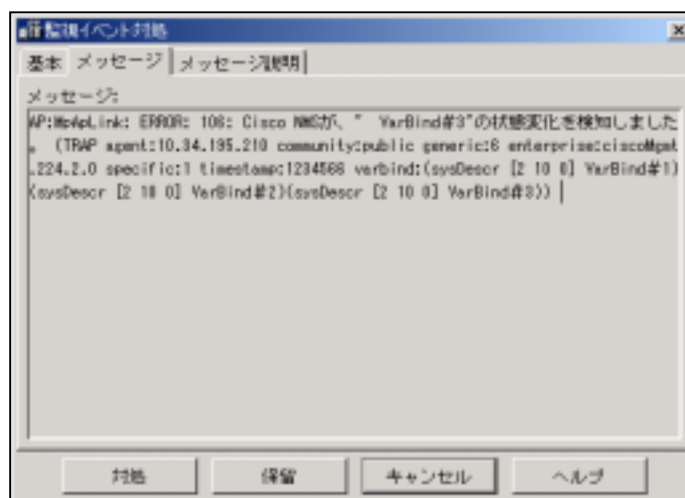
擬似トラップを発行すると、Systemwalkerコンソールの監視マップ上のCisco機器(下の例ではc4700)に赤いバツ印が付き、監視イベント一覧にトラップメッセージが変換されて出力されます。



【図3-17 監視マップ確認】

監視イベントメッセージのメッセージ詳細を確認し、意図した通りのメッセージが表示されているか確認します。

実際のトラップメッセージを受信した際には、「VarBind#3」の箇所は、その時のvarbindの値が表示されます。



【図3-18 メッセージ詳細確認】